In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	『法華経直談鈔』における因縁の位置
Author	廣田, 哲通
Citation	文学史研究. 30 巻, p.1-10.
Issue Date	1989-12
ISSN	0389-9772
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学国語国文学研究室
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

『法華経直談鈔』における因縁の位置

廣田哲通

一　はじめに

仏教説話について考えていると、それに深いかかわりをもつ概念である譬喩と因縁が並列的に把握されることがよくある。一例をあげれば『発心集』序文では「仏は衆生の心のさまざまなるを鑒み給ひて、因縁・譬喩を以てこしらへ教へ給ふ」とある。また、たとえば法華経においても、因縁、譬喩の語例を徴するに、そのいくつかは「諸の仏・世尊が種種の因縁と譬喩と言辞とをもって、方便して法を説きたもうは」（譬喩品）などのように、因縁と譬喩は言辞とともに並列的に把えられている。しかしまた、語誌として、生成の上からみて譬喩と因縁は共通項をもつと共にかなり異なる相をもちあわせていることも事実である。

本稿では、『法華経直談鈔』（以下『直談鈔』と略称する）を対象として因縁の用例を吟味することによって、その概念を明確にし、譬喩との類似、差違をあきらかにし、『直談鈔』及び直談物の論述の方法を考える一助にしたいと考えている。と同時に、それは広い意味での文学における因縁の意味を考えることにもなる。なお、『直談鈔』の譬喩については、『女子大文学』三九号（昭和六三年三月）で「譬喩の位相――『法華経直談鈔』の論述のしくみ――」と題して論じたことがあるので、本稿中でも必要に応じてそこで論じたことと対比して検討を加えていくことがある。

説話を考える上で、ことに仏教説話を考える上で、その原点として譬喩と因縁に着目する論文に、山田昭全氏の「「因縁」と「譬喩」と――説話の原点をさぐる――」（『解釈と鑑賞』四九巻一一号、昭和五九年九月）がある。その要諦をかいつまんでいえば、説法の方法には仏教の始原以来因縁と譬喩があって、それは法華経理解の伝統的な解釈である三周説法とも重なり、また人間の基本的な思考法にも応じるものであって、説話の原点でもあるという指摘である。筆者も基本的にはこのような見方に立って、最終的には『法華経直談鈔』、直談物の論述における因縁の位置について考えてみたい。

二　因縁をめぐる二・三の事例

生成の過程や、概念の措定の検討をはじめる前に、日本文学史の中から、因縁にかかわる物語のいくつかを取り上げて考察してみたい。

まず、『直談鈔』化城喩品の中に、法華経の中核をなす思想の一つである十二因縁を説明する狗那羅太子についての一項がある。十二因縁は万物の生成・変容の法則・原理を示す仏教哲理であるが、それに身を添わせて展開するこの物語自体が因縁であると一概にいえるわけではない。ただ、盲目の王子狗那羅太子の一生を述べて「其時ノ説法ニハ何事ヲ説ヘ玉ソト云ニ此ノ十二因縁ノ流転還滅ノ相也」と結ぶところからしても、この一代記の各プロットは十二因縁の具象化と考えてよい。『直談鈔』の狗那羅の話の内容は追って述べるごとくであるが、その話に至るまでに『直談鈔』は「十二因縁ノ事」の項において十二因縁の一つ一つの意味を解説する。そして「十二因縁ニ付テ阿育王経ニ見タリ」として次のごとくの狗那羅の話を引く。

狗那羅は眼が殊に美しかったために継母にねたまれ、彼女の謀略にあって、父の病を直すために自ら眼をくりぬいてさし出す。彼は盲目になった為に王位をすべり琵琶法師として諸国を遊行するうちに父と再会し、仏供養をする場で両眼平癒する。

必ずしも、この話が因縁であるという訳ではないし、ある意味では因縁の概念を譬喩、物語で見事に説いた例といえようか。ただ、この話は前述のように「十二因縁ニ付テ」と引かれていて、かつクライマックスでの奇蹟がおこるときの説法が「十二因縁ヲ説玉フヲ」ということからしても、「惣シテ於テハ十二因縁ニ重々ノ義有レトモ畧スル之也」からみても、因縁と深くかかわる物語であることは間違いない。

やはり因縁の概念にかかわって注目されるのが前掲の山田氏の論文の冒頭でも引かれる古作の能、丹後物狂における因縁の概念である。一曲は、岩井と息子花松の別離と再会の物語であるが、そのクライマックス（再会の場面）において、父の側においても息子の側においても、その人物の今に至るまでの閲歴という意味で、それぞれに因縁説法という語が一回ずつ用いられている。

いま一つ、もとは『賢愚経』、『経律異相』などにある話であるから、日本での概念という訳ではないが、『三国伝記』一巻二二話に「珠離比丘尼事」という話があって、ここに「仏此ノ因縁ヲ説テ曰ク」として話が引かれる。この世に生まれた一女子が奇蹟的に「花麗芬郁ノ衣ヲ着乍ラ」生まれたことのわけを仏が「此ノ因縁ヲ説テ曰ク」としてこの女性の前世における出来事とそれの今世との必然的関係について説く。典型的な因縁の説話である。

後二者はいずれも因縁についての明確な概念を有した事例であるが、この両者においてもなにがしかの違いといくつかの側面をみることができる。いずれもある事柄（事件、帰結）にかかわって、それに至るまでの経緯を因縁として位置づけているが、その経緯は現在における事柄に対する過去世の出来事であったり、今世の出来事であったりする。また、因縁の内容自体は、たとえば譬に対する法のような対応する対極的価値（表現）はもたない。以上のような事柄を、典型的な因縁の例から抽出した問題点として念頭におきながら、因縁にかかわる様々の問題を考えてみる。

三　因縁の経緯

(1)　因縁の経緯

因縁の概念や語誌について、その始原を辿ると、仏教における表現乃至内容の代表的かつ根本的な分類概念である九分教、十二分教

にいきあたる。今、より一般的な十二分教についてみるに、それは経典成立以来の分類法であって、従ってそれは、時代によってまた部派により呼称、内容もかわっているし、また十二の分類の基準も内容によったり、表現形式によったりしていて一定しないが、一例として契経、応頌、記別、諷頌、自説、因縁、譬喩、本事、本生、方広、未曽有法、論議から成る。そして、そのうちの因縁、譬喩は、本来的には、大旨、因縁は「ある説法などがいかなる因縁条件のもとで説かれたかの序文的な物語」、譬喩は「元来は「英雄的行為の物語」である」（『仏教要語の基礎知識』（水野弘元著））などと把えられている。ただ、時代を下るに従っていずれも多様な変貌を遂げ、教訓物語乃至単なる物語ほどにゆるやかに解したほうがよいようになる。なお十二分教が最も端的に、鮮明にあらわされているのが法華経であるといわれる。

(2) 法華経における因縁

さて、譬喩、因縁を含む十二分教の概念が最も鮮明であるのが法華経であり、かつ、本稿の課題が『法華経直談鈔』の因縁の位置を見定めることであってみれば、諸仏典の中でも法華経がどのような因縁の概念をもっているか簡単にでも見ておく必要があろう。法華経中、譬喩の語例が三〇例であるのに対して、因縁の語は八八例とはるかに多い。これらのうちにはおのずから譬喩と並出しない場合も多くその場合はものごとの来由、原因というような意味をもつ。一方、言辞とともに譬喩と並んであらわれることもしばしばあって、ことに注意され、以下にこの場合の法華経内での位置付けをみてみることにする。たとえば、次のような例がある。

われ、先に、諸の仏・世尊が種種の因縁と譬喩と言辞とをもって、方便して法を説きたもうは、皆、阿耨多羅三藐三菩提のためなり、と言わざりしや（譬喩品）。

無量無数の方便と種種の因縁と譬喩と言辞とをもって、衆生のために、諸法を演説したもう。この法も皆、一仏乗のための故なり（方便品）。

これらの事例からわかるように、法華経において因縁、譬喩は次のような構造になっている。

真実 ―― 方便

〈教＝非言説〉　〈言説〉

言辞　譬喩　因縁

言辞　譬喩　因縁　方便

それでは、仏は何故に真実（一仏乗）を説くために方便として因縁、譬喩、言辞を用いたのかというと、法華経は難解の法だからというわけである（「われは無数の方便と種種の因縁と譬喩と言辞とをもって、諸法を演説するに、この法は思量・分別の能く解する所に非ずして、唯、仏のみ有りて、乃ち能くこれを知りたまえばなり」（方便品））。そしてその構造は方便品の冒頭に明確に示されている。つまり、「諸仏の智恵」は「解り難く入り難」いから「声聞・辟支仏」にはそのままでは理解されないので、「種種の因縁、種種の譬喩をもって、広く言教を演べ、無数の方便をもって、衆生を引導」する

のだ。言い換えれば三乗（声聞・縁覚（辟支仏）・菩薩）それぞれの機根に応じて説法をする（対機説法）というわけである。このような構造の一齣として位置づけられる因縁の内容、それに付随する概念、性質は、譬喩らと並出しない多くの因縁の用例によって法華経の叙述のそれぞれの部分を指して明らかに示すことができる。そして、前述のような法華経の一乗三乗の考え方は、すでに、次に述べる三周説法への導火線になっている。

(3) 三周説法のこと

法華経学の中で、また、法華経以後の法華経解釈の中で、たとえば『法華経義記』、『法華経文句』などにおいて三周説法ということがいわれる。これは、法華経の第一段階の成立とみられる中核部分（方便品第二～人記品第九）が法説周、譬説周、因縁説周からなるとするもので、法華経中、迹門（序品第一～安楽行品第十四）を序分、正宗分、流通分に分け、そのうちの正宗分（方便品第二～人記品第九）を方便品の整然たる詳説と把えて法説周（方便品、譬喩品の大部分〈領解、述成、授記〉）、譬説周（譬喩品〈正説〉、信解品、薬草喩品、授記品）、因縁説周（化城喩品、五百弟子品、人記品）に分かち、正説、領解、述成、授記のサイクルを三度くり返す。この三周説法は対告衆に応じて説き方をかえるというもので、法は上根の者に、以下順次機根の劣る者に対する説き方である。従って、三周説法は法華経自体にある、真実方便や一乗三乗の概念と発想において重なりながら、法説周が法華経の真実とは重ならないなどの点において、構造の全体としては別個のものと考えねばならない。三周説法における三要素（三周）はいかに説くかという分類であって、ここでの法と譬の相違は方法の相違であると考えられる。三周説法において因縁説周と位置付けられる化城喩品、五百弟子品、人記品の諸章が因縁と深くかかわることは、『直談鈔』においても同様で以下の考察の中で詳しくふれるところである。

四 『法華経直談鈔』の因縁

(1) 因縁の説話

法華経には、その迹門（前半）の正宗分に法華経享受史の中で三周説法と理解される構造があって、その中の因縁説周には化城喩品から人記品までの三章が該当し、『直談鈔』中においても、この三章に因縁の語例も、因縁として説かれる説話も特に多い。しかし、注釈書『直談鈔』の中では因縁説周と位置付けられる三章の中だけでなく『直談鈔』の全体において、その論述の構造の一部として因縁の概念、及び因縁として説かれる話があげられる。本稿ではそのような『直談鈔』の論述の構造の中における因縁の性格をあきらかにしていきたい。

まず、『直談鈔』の中で、因縁として引かれる話のいくつかを対象にして考察を加える。序品に「目眼寺因縁事」（金台院本欠）という一項がある。因縁の語は前記の標題にみえるだけであるが、ともあれ次のような物語である。

玄奘三蔵が天竺で回国の折り、目眼寺という寺があり、脇持の観音が柳の枝に目を二つつけて持っていたわけを物語として説く。ある太子が父の病気の治療に犠牲となって両眼をたてまつる。父がわけを聞いて嘆いて、仏弟子に尋ねると弥陀を祈れと

いう。一心に弗陀を祈ると来迎があって観音が柳の枝に二つの目をつけてもってきて太子の眼を元のごとくにした。だから「其時此寺ヲ立名『目眼寺』」という。

寺院の名前と本尊の有り様についての話である。

また、五百弟子品に思食（念食）について『三思食ト云ハ思案ニ勢ヲ入レハ是ヲ食ト或ル也』」として「思食」のおこりとしての倶舎の二つの因縁について記す。

天竺に一人の老翁が他国へ行く時、袋を一つ子にあずけ、中に食物があるが帰ってから汝に与えようという。この子は父が帰ってからこれを食べることになるだろうと思っているうちは存命しているが、隣人がそそのかして、この袋をあけ、灰だという声をきいて子は即死した。

商人たちが航海中に難破して食物が尽きそうになり、彼方に山が見えるので人家があって食にありつけるだろうと近づくが、それが波頭であったとわかって即死する。

思食、念食という仏教語の由来を説く話である。話の内容は譬喩として説こうと思えば説ける話である。

また、五戒のうちの飲酒戒のおこりについて「而ルニ五戒ノ中ニ誡ニル飲酒ヲ事ハ此尊者ノ因縁ヨリ起ル也」として莎伽陀についての話を載せる。この話も五百弟子品にあって、五百羅漢の一人莎伽陀の注釈として載せる。

悪竜が大雨をふらして人民を苦しめるので仏が莎伽陀を悪竜退治に遣わす。彼は神変を現じて悪竜を鉢の中へとじこめて意気揚揚と帰るが、喜んだ人民が設けた酒宴で泥酔して田の畔に臥してしまい、酒の香を聞き虫や蟇蛙がへばりついている所へ仏が通りかかり激怒して、これより酒を戒めた。

戒のおこりについて述べる話であり、釈迦時代のもちろん現世における話である。

(2) 五百羅漢の因縁

さて、因縁の説話のいくつかをあげて考察する中で、その性格を抽出してきたが、今までわざととりあげなかった相類似する二つの話がある。一つは授記品にみえる『五百人ノ声聞ノ授記ノ因縁』でありもう一つは五百弟子品の「五百ノ阿ラ漢因縁ノ事」である。前者はこの章でみられる目連への授記に続いて授記品の最末尾にある五百声聞授記の約束の因縁を、目連が過去に要文を誦したのを五百の蝙蝠が聞いたためであると説明する。この所法華経に、目連への受記の重頌がおわったのち「わが諸の弟子にして　威徳を具足せるもの　その数五百なるにも　皆、当に記を授くべし　『未来世において　成く成仏することを得ん。われ及び汝等の　宿世の因縁を　吾れ今、当に説くべし。汝等よ、善く聴け』」とあって、次々章五百弟子品において説かれる五百弟子への授記の約束を述べる内容であって、従って法華経成立論においてはこの個所、化城喩品、五百弟子品が成立したのちに補綴された文であることが明白であるとされている。だから、内容的にはこの五百の声聞への授記は次々章の五百弟子への授記と同内容であるから関連してあげられる説話も同様であって不思議はないのであるが、前者では、その手前に目連への授記が説かれるので、要文を誦した僧を目連としたのであろう。もちろん本話は、その五百の声聞の因縁を説話的に説明したとみな

すことができる。

後者は、五百弟子品の主題である五百人の阿羅漢への授記にまつわる因縁である。本章で千二百人の阿羅漢が授記を希望するが、仏はそれを約束するとともに、本章ではそのうちの五百人に対して授記する。五百人が授記されるという出来事の原因、背景を彼らの過去世におけるできごととして因縁で語る。話は前者と同様で大木のもとに雨やどりをした数多の旅人の毘曇を誦えるのを聞いた五百匹の蝙蝠が人間に生まれ仏弟子となり羅漢となって、今法華経を聞いて授記されるという（毘曇という小乗に結縁したために羅漢となる）。そして両話とも、声聞・羅漢に授記されることの理由、またその数が五百人であることのわけとして説話が説かれることが因縁として説かれることの所以である。

もちろん、このような話は単なる法華経聴聞の功徳譚としても当然成立するわけで、たとえば、十匹の蝙蝠であって五百匹の蝙蝠ではないが同じような話が随喜功徳品にある（ひきつづいて、十匹の猿を主人公とする同様の話がある）。しかし、この話は、この事実が今の某某の原因になっているというかたちをとっていないから、因縁という語はでてこないし、因縁の話とはすべきでない。また、五百羅漢の因縁については、もう一つ全く別の話もある。

死んだ父母のために、息子金寿が父母の夢告によって塔をたてようと勧進をするが、一人の棟梁が五百人を勧めて塔をたてる。

それが五百羅漢で棟梁は今の富樓那尊者であるという。

因縁というスタイルで各様の話が成立するという例示になろう。

これらからわかるように現世におけるある現象（出来事、事件、おこり）が現前するための過去世乃至現世における必然的要因が話として説かれるのが因縁の説話ということになろう。

(3) 菩薩などの名前の由来

因縁としてひかれる話の中には菩薩や仏弟子たちの名前の由来や属性の由来などを説く話がいくつかあり、因縁の説話の中の一まとまりのグループをなしている。

まず、法華経序品冒頭近くには、文殊菩薩ほかの十八人の菩薩があげられ、『直談鈔』では「文殊菩薩出生吉祥事」以下に彼らの伝記的事跡が述べられるが、そのうちの何人かについて因縁としてふれる（この項、注記する一部を除いて金台院本欠冊にあたる）。まず観音についての因縁を説き、またその中に弥陀や釈尊、勢至のことも位置づけるので、標題は「弥陀因縁事」とある。ここでは、今観音になった由来、わけとして過去世における所業のありようについて述べる。「去ハ悲花経第二巻ニ此菩薩ノ因縁ヲ説ク時」とはじめて、昔、無上念王とその臣下宝海梵士がいて、その子が出家して宝蔵比丘、のちに宝蔵仏となった。これをきいて、無上念王と千人の太子、そして宝蔵比丘の父の宝海梵志（士）も出家して宝蔵仏の弟子となった。その時の無上念王が今の弥陀、宝海梵志が尺尊、千人の太子のうちの第一、第二が観音、勢至であるという。そして、弥陀は過去世では無常念王であり、観音もその王子であったから弥陀、観音となっても娑婆世界を慈悲のまなざしでみるのだという。因縁の概念からすると弥陀、観音が娑婆世界を深くあわれむという今の有り様は前述のような次第であるという構造になっている。そして、ここでは珍しく「観心ノ時ハ」として、この観音についての属性を

理念でもって「三智名観三諦名世三観是諸本故名音ト判セリ」と説いて、観世音の話に「三諦三観ノ功徳ヲ顕」意をこめているのだという。「観心」は、法、仏法、観解などとともに『直談鈔』の事理、法譬による論述の方法の中にあって理、法の側の性質を示すテクニカル・タームである。だから、ここでは因縁の性質をもつ話が「法」と対比される性質をもってあげられる珍しい例である。とともに、『直談鈔』の論述の方法に深くかかわってくる事例であるということにもなる。

「薬王菩薩事」の条では「此菩薩ノ因縁ヲ云ニ」として、薬王も過去世に、観音、勢至、文殊とともに千人の太子の一人として発心したが、彼は三つの大願をおこしたとし、そのうちの一つ何梨勒丸をもって沙門の病気を直したことから薬王菩薩となったという。

また、観音の名前の因縁（由来）は、法華経そのものの中でも普門品の冒頭において、仏が、無尽意菩薩の問に答えるかたちで説くが、それに関連して、『直談鈔』でも以下に一部をあげるような文言でもって詳細に説かれる。

故無尽意菩薩観音ノ因縁ヲ問明玉フ事ハ境智ヵ冥合シテ自然ト慈悲ノ顕ル、姿也

我等ハ観音ノ因縁ヲ知トモ一会ノ衆ニ悉ク観音ノ由来ヲ為令知対告衆ト成テ問玉フ也サテ以何ノ因縁ヲ名観世音ト哉ト問玉フ事ハサテ妙音菩薩ハ浄花宿王智仏ノ国土ヨリ此娑婆世界ニ来玉フ時八万四千ノ妓楽ヲ奏スル故ニ随テ此衆ノ因縁ニ問玉フ也

如レ其名ヲ云ヘハ頓躰顕ル故也仍テ観音ノ名ノ因縁ヲ問玉フ也

また、普門品に千手観音の千手千眼の由来を説く項があり「一経ノ中ニ千手千眼ノ因縁ヲ説ヲニ」（金台院本）とはじめて、過去遠々の昔、偏光童子がわかれた父母の為に千燈千香の供養をしたためにその功徳によって千手千眼を得たことなどを説く。

このように因縁の記事の一類に、名前が付けられたわけを過去世におけるその菩薩の性格や所業を通して説くというパターンがあり、これは殊に、法華経そのものの内容と重なったり、非常に強く密着している。

菩薩の名前の由来の説明ではないが、前の諸例と同質の一例として序品中、「阿闍世因縁事」と題される一話がある。それは、『観無量寿経』に詳しい頻婆娑羅王、韋提希夫人、子の阿闍世王をめぐる物語で、なかんづく、阿闍世王の未怨、無指という別称の由来を出生時の物語として説く。

上に述べてきたような因縁の説話は、譬喩の場合のように対応する論理の概念をもつことは原則としてなく、またその性質上どうしても経典そのものに密着したり、直談物特有というよりも、数多の法華経の注釈書全般に普遍的にみられて、伝統性、伝承性の濃厚な説き様ということができる。阿弥陀や観音の因縁の叙述などのように、法華経そのものの叙述の補足といっていいほどの記述である場合も多い。もちろんまた、因縁の説話は、インド、中国の話がほとんどで、それも釈迦の前現世時代にまつわる話が多く、日本の話はごく少なく、かつそれも古いものであって、直談物の説話の多くが今の話、最近の話をあげているのに対して、古く、かつ性質、機能も直談物の他の多くの説話群とは異なる。

(4) 注目すべき事例

さて、前項末で整理したように、『直談鈔』の因縁の話は、説話とは認定できるが、直談物に独特の論理構造の中にとりこまれて、論理に対する事としての役割を果すものでは、原則としてないというその特色を見い出した。

ところが『直談鈔』の全体がもつ論述の原理に引かれてか、わずかながらそのような観点からも注目すべき因縁の事例が見い出せる（すでに序品の観音の因縁について述べた時にみた「観心ノ時ハ」もその一例であるが）。

一つには授記品中にみえる迦葉の記事である。授記品で授記される四人のうちの第一番迦葉について、法華経では、彼が後世において仏となり、そのときの名を光明如来というと述べるが、『直談鈔』においては、光明如来といわれるわけを因縁として述べる。つまり、迦葉は過去世において、貧女であったが身を売って仏を綵色したため後世常に光明に満ちていたという。このように本話は摩訶迦葉の伝記の一部をなしている。迦葉の記事は、『直談鈔』序品に十六長老の一人としてあって、この世における一代記が示されると共に、過去世においても「依テ何ナル因縁ニ如此ノ身ニ光リ有ルソト云ニ昔シヒハシ仏ノ滅後ニ貧女有リ」とはじまって、貧女として堂塔の修理を思いたち薄打ちに頼むが、後、薄打ちと夫婦になるという『増一阿含』の話を載せて、これが、別称光破、飲光と呼ばれる因縁であるという。従ってこれらは、授記品のこの話も含めて、十六羅漢の伝記的記事であり、かなり古いものであり、かつ法華経注釈書でも直談物に限らず諸注においてみえる記事である。それはそれとして、授記品の先に掲げた梗概のあとに「是ハ因縁ノ釈ノ心也サテ約ニル観心ニ時ハ四智円明ノ悟法界遍照ノ内証ヲ指シテ光明如来ト云也」とある。「約ニル観心ニ時ハ」として、因縁釈の対極にある説明の仕方でもって光明如来の内実を理念的見地から解釈してみせる。「約ニ観心ニ」が、譬や事に対する理念的説明を示す場合に使われる常套句であることは、「サテ観心ノ時ハ枳椇枷ト云ハ財宝也」（普門品。金台院本欠）、「取夫ニ穿鑿高原ノ事約ニル観心ニ時ハ」（法師品）などの類例をあげることによって明らかである。因縁の内容は、他の場合と同じように、後世成仏して光明如来となるというわけを迦葉の過去世に託して述べる話であるが、その話がちょうど光明如来を説明するにあたって理（観心）に対する事の役割を果しているという訳である。『直談鈔』における因縁の役割としては珍しい例である。

いま一つ、方便品に友を鬼と思って戦うという話がある。「大乗平等法ノ事」のもとに大小乗不二であるということを述べて、そのことの因縁として「玄義ニ引テ一経ヲ一ノ因縁ヲ尺ヘリ」と記して次の話を載せる。

ある男が旅に出て宿がなく、鬼が出るという堂にとまる。彼の知人がやはり、この堂にとまろうとして、お互いに相手を鬼と思って、堂の戸の内と外で一晩中戦う

大小乗が相争うことは無益なりという主旨をこの話で展開し、なおかつ「是ヲ法門ニ合スル時」として、この話の意味する所の内容を大小乗隔情の様として説く。ただ、この文段は明瞭に『直談鈔』の論述の方法の中にとりこまれた例では るが、因縁の結果が大小乗不二というのも特異で、話の内容も典型的な譬喩であり、「玄義ニ引テ

一経ヲ一ノ因縁ヲ尺玉ヘリ」も今一つ不分明でこの「一ノ因縁」が上記の説話を指しているかどうか不確かである。

(5) 因縁の説話の共通項

因縁の説話は、ある人物、ある出来事、ある名前、ある行事ができる理由を説明する。だから、説話の一群の中では、ものごとのおこりを説く説話と関係を深くする。以下に、すでにみてきた因縁の性格、特質をいろいろな角度から抽出しておこう。

○因縁は経文と非常に密着していて、法華経自体の叙述の補足と看做してもいいような場合もある。

○また、説話も、インド、中国のケースが多く、それも古いものが多い。

○だから、法華経注釈書の中でも伝承性が豊かで、普遍性をもち、譬喩に比べて、直談物としての特質は鮮明でない。

○また二元論的に対立する概念の一翼としての役割をもって因縁の説話が提示されることは原則としてない。

○ただ、譬喩と因縁の差異は話の内容というよりも、説き方、位置付けの仕方の違いであって、境界領域では、説き方によって同じ素材が譬喩にも因縁にもなる。

なお『直談鈔』の中には、今までみてきた因縁の説話以外にも因縁の語例は多く、教理解説においても因縁の語はよく使われるし、十二因縁の解説（方便品・化城喩品・普門品）や一大事因縁（薬王品・神力品）についての言及もしばしばみえるが今はおく。

五　『法華経直談鈔』の論述の方法

『直談鈔』の論述の方法の一環として、すでにみてきた本書における因縁を考えてみるならば、次のようなことがいえる。まず、『直談鈔』においては、これは法華経、天台教学そのものがもっている特質でもあるが、諸法実相、方便真実、権実、一乗三乗などの法華経自体の論理に基づく二元論的な把握法があって、ことに『直談鈔』などの直談系の注釈書においては特にその論理展開の仕方が重視され、かつ注釈の方法として有効に力を発揮する結果になっている。ほんの一例を示せば随喜功徳品にみえる「随喜」という語を説明するにあたって随は随順なりとし、随順に事理の二ありとして、事と理の二様で随順の意味を説明する。『直談鈔』では、このような法華経及び天台教学の論理構造に基づきながら、より有効でより特徴的な相対立する二元論的なものごとの把握とその不二という思想によって、法華経一書を注釈する。それは事理であり、法譬であり、法の側では「仏法」、「法門」、「法」、「観心」、「観解」という語でもって説明することもあり、譬の側では「事相」、「譬喩」などという語で説明されることもある。そして、そのおりの事、譬の役割をもって説話・物語があげられる。つまり、論理を、それと対極にある方法でもって説明するのが譬喩なのである。つまり、譬喩は二元論的把握法の一つの翼をにない、『直談鈔』の論述の方法の一方の核をなし、かつ、論理に照応するかたちで述べられる。それは狭義譬喩経典の述べ方であり、ジャータカの述べ方でもある。

ところが、すでに述べてきたように『直談鈔』においても、因縁はこのような譬喩のもつ性質をもつわけではない。つまり、因縁は説話・物語ではあっても、ある対極の概念とともにあるのではなく、

単立する。そして、それは法に対する対極として二元論的に存在するのではなく、過ぎ行く時間の中に因と果として把えられる。つまり、時間的経過の中に、今と過去との関係を述べたもの、従って説話・物語が今、あるいは過去にほとんど圧倒的なウエイトがおかれていたとしても、過去と今との関係の有り様、それも必然性のある関係の有り様として説話・物語が説かれるのが、本源的な因縁の説話ということになる。そして、因縁の説話は、現在（ある出来事）を起点にして、その解釈のために過去を見渡す。だからまた物事のおこりの説話とも重なってくる。このように、譬喩と因縁の関係をみるとき、因縁は話としては『直談鈔』の中で有意義なものとして存在するが、論述の方法の一環としての役割を受け持つことはない。つまり、説話・物語が事理の事、法譬の譬としての役割をもって掲げられるとき、因縁のそれはそこに位置を占めるべき場をもたないわけである（すでにみた、ごくまれな注意すべき事例を除いて。そしてそれらのまれな事例は、『直談鈔』の論述の特色に組みこまれようとした、組みこまれる可能性を示した稀な例であった）。

六　中世文学の広がりの中で

以上の分析をふまえて、まとめとして最後に感想めいたことを書きとめておく。因縁という概念は、話そのものの内容を規制するのではなく、説き方、方法を示している。だから話そのものを集めた因縁の集は、因縁であることを稀薄にする。また、因縁は元来ある物事の起源、由来を示すという性格を有するから、ごく簡単に名所や地名などのわけ、由来やいわれなどを説明することにもなる（『山門聖之記』など）。また、近時山崎誠氏らによって精力的に発掘、紹介がなされている『拾珠抄』・『因縁處』などにおいても、因縁は仏事にまつわる作法・儀式についての由来を語りつづけてその総体が因縁という概念で示される。かように元来の因縁の意味を底流にもちながら因縁の範囲はゆるやかになり、広がっている。同時にまた因縁は中世の文芸においてある領域をうけもって、注釈、類書、説話の中のある発想法として一齣をなしている。

〈付記〉

○本稿は仏教文学会昭和六十三年度支部例会（十二月十日、於大東文化会館）での口頭発表を礎にして、全面的に書き改めたものである。この口頭発表以後、『法華経直談鈔』の本文研究は大きな進展があった。つまり、『法華経直談鈔古写本集成』（一九八九年二月。臨川書店刊）が刊行され、その解説で、渡辺守邦氏は金台院本は栄心が成菩提院に奉納した写本であるとの判断を示された。この発表の論旨は金台院本においてもかわらないが、渡辺氏の解説の主旨にしたがい、金台院本によって再吟味の上、本文も金台院本によった。

○本稿中の引用本文は下記に拠った。『法華経直談鈔』〔金台院本。なお、金台院本の欠冊部分〔第二冊（序品後半に該当）及び第十冊の巻首部分（普門品冒頭）〕は寛永刊本（臨川書店影印刊行）に拠った〕、『法華経』（岩波文庫）、『発心集』（新潮日本古典集成方丈記　発心集）。